

別添資料 2 事後評価結果概要

相手国	研究分野	研究課題名・ 研究代表者名	支援期間	評価 結果	評価結果概要
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	インシデント情報のモニター及び分散技術 NICT 中尾康二グループリーダー ミシガン大学 Farnam Jahanian 教授	H16-19	優	ネットワークインシデントの分析に関する観測結果や傾向情報の共有、および観測・分析手法に関する日米の意見交換により両国のシステムと分析技術の高度化を達成している。ワークショップなども計画通り実施された。多くの研究業績を発表しているが、日本側の成果であり、米国の業績、あるいは共著論文は挙げられていない。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	暗号技術に基づくプライバシー安全管理システムの研究 筑波大学 岡本栄司教授 スティーブンス工科大学 Rebecca Wright 准教授	H16-19	優	研究メンバーによって世界に先駆けて開発された技術などを軸に、匿名性と安全性の両立を図るという匿名署名に関する研究成果を始め、多くの成果を挙げているが、相手国との交流を踏まえた成果であるとは必ずしも判断できない。本プロジェクトが開催した国際会議によって、これまで理論と応用に分かれていたペアリングの研究について、より総合的な観点からの研究が推進された。また、この国際会議の開催を通じて、交流の深化や人材育成上の効果があった。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	日米サイエンスグリッドにおけるセキュリティ基盤の構築 産総研 田中良夫主幹研究員 バージニア州立大学 Marty Humphrey 准教授	H16-19	良	日米間の大規模科学技術計算のために定常的に利用可能なサイエンスグリッド実現のため、複数の組織により構成されるグリッドのセキュリティ基盤の実現に必要なシステムの設計及び評価等について研究・交流を行ったが、電子メールやビデオ会議による交流が主であり、内容のある交流がなされたか疑問。

別添資料 2 事後評価結果概要

アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	トラストと安心に関する研究 岩手県立大学 村山優子教授 ワシントン州立大学 Carl Hauser 准教授	H16-19	秀	これまで余り研究されてこなかった「安心感」の要因や構造について精力的な研究を重ね、米国側とも積極的に研究交流を行って多くの成果を挙げた。サービスの評価に利用者の安心感という新たな視点を導入する点で大きく貢献し、論文等の発表も活発に行った。研究交流は計画以上に積極的に行われ、活発な研究交流を通じて人材育成に貢献した。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	フォレンジック手続きガイドラインの作成のための基礎的研究―日米において証拠の相互利用を可能とするために― 東京電機大学 佐々木良一教授 ミシシッピ州立大学 Rayford Vaughn 教授	H16-19	優	デジタル・フォレンジックに関して技術と法制度の観点から日米交流を重ねたことはフォレンジック手続きガイドラインの作成に向けて有意義であった。日米双方のフォレンジック技術と、電子証拠の法的な側面の差異を明らかにすると共に、パソコン使用者の不正行為に対する証拠保存技術の研究開発を行い多くの論文を発表しているがほとんどの著者は日本人であり、米国の研究者と共著論文が少ない。研究交流は計画以上に積極的に行われ、人材育成上の成果もあった。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	高サバイバル・高信頼フォトニック・パケットスイッチ 東北大学 堀口進教授 ポリテクニク大学 Jonathan Chao 教授	H17-19	優	次世代光ネットワークが必要とする高信頼光スイッチルータ等に関して十分な成果を挙げており、ワークショップ等も計画通り精力的に行われた。国際誌に 18 編の論文を発表しているが、多くは東北大の成果であり、人材育成も十分だったとは言い難い。

別添資料 2 事後評価結果概要

アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	仮想計算機と仮想プライベートネットワークによる安全で効率的な情報基盤の構築 筑波大学 新城靖准教授 ジョージア工科大学 Calton Pu 教授	H17-20	良	仮想計算機と仮想プライベートネットワークによる情報基盤とセキュリティ、及び、高速化技術の観点から日米の研究者が研究交流を行い、日米共著の論文2件を含め、対外発表も豊富に行われているが、研究者が日米1人ずつという最小限のメンバー構成であり、人材育成が成されたか否かの判断は困難である。ワークショップも開催されていない。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	安全で効率的なデータアクセス制御システムの設計及びそれに適した新たな暗号技術の創出に関する研究 産総研 花岡悟一郎研究員 コロンビア大学 Angelos Kermytis 准教授	H17-20	優	必要とされる性質や設計の方法論が不明であった Dual Receiver 暗号に関して、日本側研究チームで多くの論文がまとめられており、米側で提案されていた Dual Receiver 暗号についての理論的考察を深めている点で研究交流の有効性が認められる。学生を含め若手研究も研究チームに加わっており、本研究遂行によって、数名の若手研究者が育っている点は高く評価される。相互派遣、相互交流が活発に行われ、ワークショップ開催なども計画通り行われた。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	ユビキタス環境におけるエージェント間の信頼に基づいた情報保護に関する研究 九州先端科学技術研究所 高橋健一研究員 ノースカロライナ州立大学 Zhaoyu Liu 准教授	H17-20	優	安全なユビキタス環境を実現するうえで主要な課題である、ユーザの振る舞いによるユーザ識別、プログラム変換による機密情報保護、エージェント間の信頼性関係アクセスコントロール手法、アプリケーションに関して研究成果が得られている。共著論文をまとめていること、本研究交流における議論を通じて、2件の研究課題が新たに得られていることなどから、継続的に議論が行われることが期待できる。ワークショップ・セミナーの開催等相互交流も活発に行われた。今後相手国との研究交流につながる人材の育成もなされている。

別添資料 2 事後評価結果概要

アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	次世代情報セキュリティシステムの設計と解析 東京大学 今井浩教授 ラトガース大学 Mario Szededy 教授	H18-21	秀	量子計算、量子通信、それを用いた安全性の基礎理論の構築において、インパクトの大きな成果を上げている。波及効果の大きい基礎理論が得られていることから、今後の持続的な発展が期待できる。また、若手研究者の国際研究交流という観点を大きな目的の一つとして捉えており、実際に研究リーダーだけでなく、多数の若手研究者を海外へ派遣していることは評価に値する。原著論文の数の点からは、その成果も大変大きなものが得られている。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	アイデンティティ連携におけるリスクを考慮した個人情報共有方式 早稲田大学 岩井原瑞穂教授 ノースカロライナ大学 Gail-Joon Ahn 准教授	H18-21	優	個人情報の開示を行なう際に、ユーザに対して要求された属性の開示に伴うリスクを提供するためのシステム開発等で計画通りの成果を挙げており、相手と共著で論文を発表している。研究代表者が期間中に相手先機関を 12 回訪問している点で、国際的広がりを増すという成果が認められるが、12 回に渡る米国渡航のうち研究代表者以外は修士学生の 1 回であり、他の研究メンバーと相手側の共同研究者との交流の密度が低いように思われる。
アメリカ	安心安全 (重要情報基盤保護)	次世代ユビキタスネットワークにおける先端セキュリティ技術に関する研究 東北大学 加藤寧教授 ニュージャージー工科大学 Nirwan Ansari 教授	H18-21	優	次世代ユビキタスネットワークにおけるセキュリティを確保した高品質なネットワーク制御技術の開発においてインパクトの大きな成果を挙げているが、一部の研究課題においては、当初計画からやや小型化している部分も見受けられる。相互訪問、ワークショップ等も活発に行われ、交流を通じて共著論文、国際会議などで研究成果を活発に発表しており、その過程において大学院生を含む若手研究者の育成にも効果があったと判断できる。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテクノロジー	ナノ空間に配列させた光合成色素蛋白超分子複合体間における超高速励起エネルギー移動過程の実時間動画撮影技術の確立 大阪市立大学 橋本秀樹教授 グラスゴー大学 Richard J. Cogdell 教授	H16-19	秀	ナノ空間における実時間顕微動画撮影技術の研究において相手国と多数の共著論文が発表されており、さらに3年という短期間に撮影装置のプロトタイプ作成にも至った。相互派遣も計画以上に活発に実施され、ワークショップも計画通り開催された。若手研究者を筆頭著者とする論文発表や研究発表が行われていることから、意見交換を含めた実質的な共同研究が行われたと考えられる。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー	高速 AFM 法による膜タンパク質のダイナミクス計測 金沢大学 内橋貴之准教授 オックスフォード大学 John Ryan 教授	H16-19	優	原子間力顕微鏡 (AFM) の時間分解能と空間分解能の向上を達成し、膜タンパク質のダイナミクス研究に新しい手法を提供することが期待出来る成果が得られた。研究期間中に大学院生が何度か相手国側機関を訪問し、相手国側機関からも頻繁に来訪者があるなど共同研究が実質的であったことが伺われる。当初の計画に比べて実際に行うことができた研究が少なく、バクテリオロドプシン以外の研究はほとんど手がつけられていないようである。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー	生物における情報変換機構の固体 NMR によるナノスケール解析 大阪大学 阿久津秀雄招聘教授 オックスフォード大学 Anthony Watts 教授	H16-19	優	固体 NMR 法を用いた立体構造解析に基づく G タンパク質活性化機構の研究方法を確立させ、広く膜タンパク質の研究に用いることができるインパクトの大きな成果を得た。両研究グループの若手研究者や大学院生が二国間相互に交流を深めながら参画し、人材育成上の成果もあった。相互派遣はそれほど頻繁ではなかったが、共同セミナー等も含め計画通り実施された。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテクノロジー	新世代ナノ計測システムを用いたアクトミ オシンモーターのエネルギー変換機構の解 明 東北大学 石島秋彦教授 国立医学研究所 Claudia Veigel グループ 長	H16-19	良	英国のべん毛研究グループとの交流に関しては優れた実績を挙げた が、当研究課題の目標である「アクトミオシンの1分子計測を行って いる日英の研究者が各自のデータについて議論し、それぞれの計測シ ステムの長所短所を明らかにし、その結果に基づいて高精度高感度の 計測手法を模索し、開発すること」に関して相手先研究グループとの 研究交流の経過と結果が不明である。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー	べん毛のモーター回転と化学感覚系へのシ ステムバイオナノテクノロジーを用いた解 析 名古屋大学 本間道夫教授 オックスフォード大学 Judith Patricia Armitage 教授	H16-19	優	日英の相補的な共同研究により、バクテリアべん毛モータータンパク 質の回転の素課程の計測解析に関しては長年の懸案を解決し、 Nature に論文を発表している。この共同研究に於いては、一方の技 術に他方が完全に依存するのではなく、双方が同じレベルの技術を持 つことができるように技術及び情報の相互移入を行い、結果を比較し ながら、それぞれが独立して研究を進める体制を構築した。相互派遣 回数も少なく、独自のワークショップも開催されていないが、上述の ような研究交流体制であるので、研究推進のための交流（相互派遣等） は過不足なく行われたといえる。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー	DNA ナノストラクチャ 大阪大学 難波啓一教授 オックスフォード大学 Andrew Tuberfield 教授	H16-19	優	極低温電子顕微鏡による構造解析技術の大幅な改善により、従来より 複雑で動的にスイッチするような DNA ナノストラクチャも設計どお りに量産できることを証明し、産業応用可能な高性能ナノデバイスの 設計構築の可能性が示唆された。しかし、高分解能の構造データが期 待できる X 線結晶解析の当初計画についての成果は報告されていな い。若手研究者が相互に相手側の研究室に滞在するなど適切な回数の 相互派遣が行われた。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテク ロジー	先端的蛍光イメージングによるタンパク質 モーターの運動機構の解明 NICT 大岩和弘グループリーダー 国立医学研究所 Justin Molloy 科長	H16-19	優	軸糸ダイニンのステップ状運動様式を確認し、その詳細な解析に基づいて、運動機構のモデルを提唱する等の成果を挙げた。英国側の世界的な単一分子計測技術が日本へ導入されるとともに、研究ネットワークを拡大したようであり、研究交流の意義は深かったと考えられる。原著論文の発表数は3年間に国際誌に2編のみであるが今後に十分期待出来る。若手研究者を研究推進の中心に置き、人材育成上の成果もあった。相手国からの来日が当初計画より大幅に少なく、日本側の重要性を認識させるための努力が必要であると思われる。
イギリス	バイオナ ノテク ロジー	G タンパク質結合型神経受容体の会合とク ロストークの1分子ナノ解析法による研究 京都大学 楠見明弘教授 オックスフォード大学 Anthony Watt 教授	H16-19	可	共著の論文はなく、共同での学会発表もない。また、最終報告書に書かれている成果と、申請段階での「現在得られている成果」に大差がないため、研究にどのような進展があったか不明。日本から相手国への訪問も少ない。英国側から研究計画に記載のない研究者の訪問があり、日本側研究者が英国との研究交流に尽力したことは認められるが本研究交流の趣旨に添っているかは不明である。
イギリス	バイオナ ノテク ロジー	生体超分子を構成するタンパク質の構造変 化の研究 JAEA 石田恒研究員 東アングリア大学 Steven Hayward 講師	H16-19	良	日本側では生体超分子構造データベースの構築ができたこと、英国側では生体超分子構造変化解析法の開発ができたことが本研究の成果であるとされているが、共同研究であることを示す共著の原著論文も、国内外の学会発表も見あたらない。ワークショップ等も開催されておらず、情報発信に対する配慮が不十分であった。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテクノ ロジー、構 造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	<i>In-silico</i> Structural Interactome Study on Structural Genomics 大阪大学 中村春木教授 リーズ大学 David R. Westhead 教授	H17-20	優	タンパク質間相互作用の解析・予測システムの構築に関して、日英双方がそれぞれ独自に多くの論文を発表している。しかし、交流の成果が複数の共著論文として結実するには至っていない。また、当初目的の多様なタンパク質間相互作用解析・予測システムを統合した網羅的なシステムの開発についての達成状況が明らかでない。若手・学生を含む交流が活発に行われ、今後の交流の発展につながることを期待される。
イギリス	バイオナ ノテクノ ロジー、構 造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	エネルギー変換やイオン輸送に関わる膜蛋白質のX線結晶構造解析 兵庫県立大学 月原富武特任教授 グラスゴー大学 N. Isaacs 統括	H17-20	秀	研究交流の目的を蛋白質の発現、機能検定、結晶化、X線強度測定と解析などの技術的問題の解決に置き、若い研究者の育成に重点をおいた優れた計画であった。共著論文には結びついていないが、日英双方で非常に大きなインパクトを持つ成果が挙がっており、人材育成上の成果も大きかったと考えられる。
イギリス	バイオナ ノテクノ ロジー、構 造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	放射光を用いた膜蛋白質結晶構造解析の基盤技術開発 KEK 岩槻壮市教授 インペリアル・カレッジ・ロンドン 岩田想 研究総括担当	H17-20	良	交流により双方の膜タンパク質を標的としたビームライン建設や高度化が進展したと認められるが、技術に関する情報交換が高度化にどのように生かされたのかは明かではない。若手研究者の派遣はなされており、将来の交流につながる人材育成は行われた。ワークショップ等が計画と異なり、全く開催されていない。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテクノロジー、 構造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	単一受容体タンパク質の動的構造変化と機能の相関 NTT 物性科学基礎研究所 鳥光慶一部長 オックスフォード大学 John Ryan 教授	H17-20	秀	日本側が開発した技術で受容体タンパク質の機能に直接関与する構造変化をリアルタイムで観察することに成功し、さらにバイオナノデバイス構築のための受容体タンパク質の膜への配置と固定の制御および電気的特性評価について、解決すべき技術的課題の解決につながる手がかりを得た。両研究グループそれぞれがもつ技術と考え方が共同研究により相補的かつ相乗的に機能していると想像できる。若手研究者・学生を含めた研究者交流も効率よく行われた。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー、 構造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	未開拓遺伝子資源としての海藻類が生産する新規で有用な酵素類の構造―機能解析に関する共同研究 鳥取大学 和泉好計教授 エクセター大学 Jenny A. Littlechild 教授	H17-20	可	当初の目的であったハロペルオキシダーゼの酵素活性・安定性の改良に関して、構造をもとにした網羅的な変異体解析が行われるべきであるが、わずかな変異体の作製しか行われていないようである。日本側の研究グループが代表者と講師1名で構成され、実験を行う能力の絶対的な不足が感じられる。相互訪問に参加したのが、両国の代表者のみで、長い期間滞在したわけではなく、若手研究者の育成にはつながらなかったのではないかと考えられる。
イギリス	バイオナ ノテクノロジー、 構造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	X線回折法による紅色細菌およびヘリオバクテリアのコア複合体の構造決定とフェムト秒レーザー分光によるエネルギー伝達・電子伝達反応間のフィードバック制御の解明 関西学院大学 小山泰教授 グラスゴー大学 Richard J. Cogdell 教授	H18-21	優	相互往来の回数もたいへん多く、また代表者だけでなく若手の交流機会を与えている。シンポジウムも2回開催されており、研究交流に伴うアクティビティーは高かったと評価できる。X線回折フェムト秒分光による伝達機構の解明などは計画通り実施しているが、共著論文がなく、その意味ではそれぞれの研究が並行して進められているだけで、相乗効果がなかったようにも見受けられる。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオナ ノテクノ ロジー、構 造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	膜蛋白質系統的構造解析に向けての基盤研 究 理研 白水美香子 上級研究員 インペリアル・カレッジ・ロンドン 岩田想 教授	H18-21	優	日本側のタンパク質発現系および英国側のタンパク質発現のモニター技術の相手国への導入、および施設の相互利用、ノウハウの交換などが実質的に行われた事は評価できる。しかし、ある程度の数の膜タンパク質の結晶化、構造解析という目標については大きな進展はなく、膜タンパク質の構造決定のハイスループット化というゴールには未だ遠いのが現状のようである。人材の交流も活発であり、また日英を意識したシンポジウムの開催なども本事業と関連して進展しているが、共著論文の発表はなかった。
イギリス	バイオナ ノテクノ ロジー、構 造ゲノミ クス及び プロテオ ミクス	タンパク質分子のナノスケール電子デバイ スへの応用 横浜市立大学 ジェレミー・ティム教授 ジョンイネスセンター David Evans プロ ジェクトリーダー	H18-21	可	ナノチューブ構造を取るタンパク質の作製が当初の予定通りにいかなかったようであり、全般的にみて、本協力研究は当初の計画書のとおりには進んでいない。英国側のカウンターパートとも1度ずつ相互訪問をしたのみで、報告書からは実質的な技術のやりとりがあったかどうかを読み取れない。

別添資料 2 事後評価結果概要

イギリス	バイオテクノロジー、構造ゲノミクス及びプロテオミクス	生体制御を担う mRNA の転写後修飾に関わる生体高分子複合体の構造生物学的研究 理研 武藤裕チームリーダー ケンブリッジ大学 Carol Robinson 教授	H18-21	優	日英の研究交流により、mRNA 翻訳後修飾に関するメカニズムの解明がある程度進められたと考えられる。共著論文も 2 報、その他の論文も出ていることは評価できる。一方、人材の交流機会については計画どおりには進んでおらず、日本側からの来訪が 0 回、英国側からの来訪も他の研究会による招聘の折に理研に訪問してもらったものであり、本事業の中での交流は少なかった。本事業実施前からの交流で既に関係が出来ていたためにこれらが必要ななかったという理由もあるだろうが、そうであれば会議などの開催による外部への発信が期待された。
イギリス	バイオテクノロジー、構造ゲノミクス及びプロテオミクス	多剤排出トランスポーターの結晶構造に基づく、多剤排出メカニズムの解明 東京工業大学 村上聡教授 ケンブリッジ大学 Hendrik W. van Veen 上級講師	H18-21	秀	提案書にほぼ沿って連携研究を行い、日本側と英国側の双方の解析を同じ試料系で行うに適した試料系の検索と発現を進め、共著論文の発表など、十分な成果を得ている。医薬品開発などに貢献できるレベルの成果に将来つなげられる可能性を示し、本事業が目指していた研究交流の典型例の一つとして、高く評価できる。日本側代表者は十分な数渡英しているが、若手の交流がなく、ワークショップも開催されなかった点は理想的ではなかったが、成果を求めた研究の中でやむをえない選択であったとも考えられる。

別添資料 2 事後評価結果概要

スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	バイオメディクス匂いセンサーの開発 九州大学 都甲潔教授 リンシェーピング大学 Ingemar Lundström 教授	H17-18	優	既存の実験結果をベースにした展開が主な取り組みであり、画期的な進展があったとはいいがたいが、匂いセンサーの機能性膜の製作において、両機関での共同研究による成果があり、交流の意義があったと判断できる。学生を含む若手研究者が、短期ながら滞在して研究に従事していることから、若手研究者の人材育成に寄与したと考えられる。研究会又はシンポジウムが開催されていないが、両国の研究グループが相互に研究室を訪問しており、計画は概ね達成されたと考えられる。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	Smad 経路におけるユビキチン依存性のシグナル伝達制御と疾患に関する研究 東京大学 宮園浩平教授 ルードヴィッヒ癌研究所 Aristidis Moustakas 主任研究員	H17-18	秀	両国の研究者の役割分担、共同研究体制の構築の面で非常にしっかりとしており、当初計画の殆どの項目について研究の成果があがっており、国際交流は成功裏に終了したと判断される。若手研究者も含めた相互間の交流や会議開催は計画通り行われた。共著論文の発表は一報のみで、学会における共同発表までには至っていないが、イメージングや RNAi に関する科学技術の進展に寄与したと考えられる。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	Systems Biology of signal transduction システム・バイオロジー研究機構 北野宏明 会長 ゲーテボリ大学 Stefan Hohmann 教授	H17-18	良	日本側の研究が進展していることは理解できるが、事業による交流が、日本側及びスウェーデン側にどのように有益に寄与したかは終了報告の中では明らかでない。研究員レベルの相互訪問はなく、双方の代表研究者のみの交流にとどまっている。本欧州と米国の研究者も参加してきており、双方共に企業との共同研究が始められていること等から進展していることは推察できるが、研究計画にある当初目標と、得られた結果にはかなり隔たりがある。

別添資料 2 事後評価結果概要

スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	マラリア原虫 <i>Plasmodium falciparum</i> ゲノムの解析 京都大学 五斗進准教授 カロリンスカ研究所 Mats Wahlgren 教授	H17-18	優	当初の予定に沿った着実な歩みを見せており、マラリア研究で新しい進展の兆しは認められるが、計画と実行の間に大きな差があることから、当初の計画自体が壮大過ぎたと考えられる。スウェーデン側から日本への訪問はあるものの、日本側研究者がスウェーデンを訪問し、先方で研究に従事するという計画が実行されておらず、交流をもっと積極的に進めるべきであった。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	単一細胞における遺伝子の発現と転写産物の共局在の解析 理研 林崎良英プロジェクトディレクター ウプサラ大学 Ulf landegren 教授	H17-18	秀	タンパク相互作用を検出する手法を日瑞共同で開発及び改良し、RNA 結合性タンパク質の生理機能を把握し、これらが有する新たな転写メカニズムの解明の可能性が得られるなど大きな成果を挙げた。これは日瑞双方の研究が協力的に、かつ相乗的に進められたことによる成果であるとする。日本側研究者がスウェーデンを訪問し、中期的に滞在して実験研究に従事するなど、今後の人材育成やネットワーク強化にもつながったと考えられ、国際交流事業としては成功したと評価できる。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	The Faithful Transmission of the Genome: a System Biology Approach 東京工業大学 白髭克彦准教授 カロリンスカ研究所 Camilla Sjögren グループリーダー	H18-19	秀	両国のゲノム研究と遺伝学研究がうまく組み合わせられ、染色体研究分野において新しい概念を創生した。特に Smc タンパクの染色体の分配、損傷修復における役割の発見は、まさに新しい知の創造である。研究交流の観点からは、研究者の相互派遣とワークショップが実現されており、積極的な研究交流があったものと高く評価される。若手研究者を含めての人材交流と人材育成も充分なされた。

別添資料 2 事後評価結果概要

スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	単一細胞生物学研究のためのマイクロ流体デバイス 東京大学 北森武彦教授 ウプサラ大学 Mats Nilsson 准教授	H18-19	優	マイクロチップ内でビーズ RCA が実施できたことは、マイクロ流体デバイスを用いた単一細胞研究の基盤・基礎的手法の構築につながる成果であり、評価に値する。しかしながら、原著論文がなく、特許も申請されていないことは残念である。一方、スウェーデン側研究者との研究交流、ワークショップ、人材育成などの観点からは、交流事業として非常に良く行われており、高く評価できる。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	新規経皮吸収型薬剤伝達システム (TDD システム) : 薬剤の放出制御機能を有するメソ構造結晶の設計と開発 東北大学 後藤順一特任教授 ストックホルム大学 寺崎修教授	H18-19	良	本研究交流プロジェクトを通して、シリカメソポーラス多孔結晶を TDD システムに応用できることを示したことは、評価できる。一方、研究成果の論文や学会発表は行われたものの、残念ながら日本側研究者とスウェーデン側研究者による共著はない。また、大学院生数十名が本プロジェクトに参加したことは一定の評価に値するものの、スウェーデン側研究者の来日がないなど、相互交流がなされたとは言えない。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	BMP 付加細胞外マトリックスを用いた新たな骨再生法 名古屋大学 上田実教授 ウプサラ大学 Joens Hilborn 教授	H18-19	可	新たなマトリックスにより骨再生が効率よくなされれば、医療への応用は大きいものになるであろうが、BMP-2 遺伝子による骨再生は新しいものではなく、BMP 含有細胞外マトリックスを用いることにより骨再生材料を作成する点において、具体的なデータなどの試験結果が示されていない。日本からは代表研究者が一度スウェーデンを訪問したのみであり、研究交流の観点からも十分な成果があったとは言いがたい。

別添資料 2 事後評価結果概要

スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	先端的単 1 分子蛍光揺らぎ測定による免疫細胞表面受容体分子動態の詳細な分析 北海道大学 金城政孝准教授 王立工科大学 Jerker Widengren 教授	H19-20	良	双方の研究代表者、ポスドクおよび大学院生による双方向の訪問が中期の滞在を含めて行われており、若手研究者にとってよい経験になったものと考えられ、今後の人材育成にはつながったと評価できる。相互派遣はほぼ計画通りであるがシンポジウム開催は十分でなかった。このプロジェクトに関する研究成果に関しては、peer review 雑誌への論文発表が全くされていない。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	Systems Biology of signal transduction システム・バイオロジー研究機構 北野宏明 会長 ゲーテボリ大学 Stefan Hohmann 教授	H19-20	良	課題終了時点では新しい知の創造や新分野の開拓としては評価できるものは乏しいが、実験と理論的アプローチの両者のバランスの取れた研究が発展したことは評価できる。また、開発されたソフトウェアが産業界で応用され始めたことは大いに評価される。学会参加時の交流だけでなくもう少し中長期的な交流が望まれる。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	マクロファージにおけるアテローム性動脈硬化症関連遺伝子ネットワークの解析 理研 鈴木治和プロジェクト副ディレクター リンコピン大学 Jesper Tegner 教授	H19-20	優	当初の研究目標の達成にはまだ時間がかかるように見受けられるが、転写制御ネットワークの新たな解析パイプラインの構築に成功するなど画期的な科学技術の進展には貢献したと評価できる。相互派遣、ワークショップ開催は想定通りなされた様であるが、若手研究者にも交流の機会を与えて本分野での人材育成やネットワーク強化につながる取り組みをもう少し行って頂きたかった。

別添資料 2 事後評価結果概要

スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	細胞内抗原徐法型ナノキャリアによる新たなワクチン療法の開発と免疫活性化機構の解明 大阪大学 明石満教授 ルンド大学 Carl A. Borrebaeck 教授	H19-20	秀	両グループの相補的協力によって、新しい免疫治療技術開発の新分野・新技術開発の成功に向けた成果があがった。協力目的が明確で具体的であり、共著論文等の成果が上がったことは高く評価できる。相互交流も多数回行われ頻繁で人材育成効果も高かったと思われる。この分野の若手研究者の育成にも大きく貢献している
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	食品試料からの微生物細胞の生菌としての音波分離 東京農工大学 松岡英明教授 ルンド大学 Thomas Laurell 教授	H19-20	良	協力研究は順調に行われたが、まだ大きな発展に結びつく迄には到っていない。研究交流は行われているが、人材の育成にどの程度貢献したかは報告書からは十分には読み取れない。スウェーデン側から博士課程学生が共同研究で来日した以外は次世代の人材育成がなされたとは言えない。ワークショップやシンポジウムは開催されなかったことなどは、若手研究者の育成という視点からはやや不十分であった。
スウェーデン	ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域	エイコサノイドとグルタチオン代謝を行う膜タンパク質の構造学的研究 産総研 光岡薫研究チーム長 カロリンスカ研究所 Hans Hebert 教授	H19-20	秀	相補的な技術を持つ両グループが協力することにより、短期間に構造解析を達成して一流紙に論文を発表した。また世界トップレベルにある日本の電子顕微鏡によるデータ収集とそのための試料作成法の技術をスウェーデン側に移転も行うなど計画以上の成果を挙げた。若手研究者の相互派遣は実施されず、ワークショップ等も開催されていないなど人材育成という視点からは少し課題が残るが、短期間に構造決定が困難とされていた小分子膜たんぱく質の原子モデルを明らかにした成果は高く評価できる。

別添資料 2 事後評価結果概要

フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	Provably Secure Software Technology and Its Applications with the Special Focus on Smart Card and GRID Applications 慶應大学 岡田光弘教授 東京大学 米澤明憲教授 国立情報科学・制御研究所 Claude Kirchner サイエンティフィックリーダー	H17-20	優	大規模な研究体制を組織して、たくさんの成果が上がっている点、双方の多くの研究者が交流して、特定の研究分野や研究手法について興味を共有するネットワークが構築できた点が評価できる。一方、申請時に提案された目標については、目標設定が大きすぎたこともあり、必ずしも達成されてない。フランス側から日本側へのインターンシップ、研究者長期派遣などを通じて、人材育成へ貢献した。ワークショップ等も計画通り開催された。一方、相手国側研究チームとの共著論文発表が少ないことから、今回の日仏交流による新しい知の創造あるいは新分野の開拓の点における評価はしにくい。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	ハイパフォーマンス計算環境における単粒子画像3次元解析ソフトウェアの開発 産総研 上野豊主任研究員 遺伝・分子・細胞生物学研究所 Patrick Schultz リサーチディレクター	H17-20	良	研究交流により単粒子解析のための高速なソフトウェアを開発するという目標に対して、プログラム開発の基本的な部分は達成された。しかし、本研究交流によって新たな知の創造や新分野の開拓には至っていない。共著の論文が一件も発表されていないことなどから、共同研究の達成度が必ずしも高くない。また、研究交流が日本からフランスへの一方通行であり、今後の研究交流につながる人材育成の点で達成度に疑問が残る。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	NEGST(Next Grid Systems and Techniques):グリッドコンピューティングのインターオペラビリティと次世代技術に関する国際共同研究の推進 国立情報学研究所 三浦謙一教授 リール工科大学 Serge G. Petiton 教授	H17-20	優	グリッドコンピューティングについて、様々な面で活発な研究が行われ、多くの成果が挙げたと認められる。共著論文は2件発表されているが、全体の成果に比べてその比率が少ないようである。研究者の派遣について、日本からの派遣は多いが、フランスからの派遣がきわめて少ないこと、ワークショップについては5回開催されているが小規模なものであった点も疑問が残る。

別添資料 2 事後評価結果概要

フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	Measurement and Modeling for Emerging Internet Applications and Security Threats 慶應大学 村井純教授 ピエール・マリー・キュリー大学 Kave Salamatian 准教授	H17-20	優	日本側のネットワークトラフィックの保有データを用いて、理論面で優れているフランス側グループの提案による時系列解析手法によって解析することによって、トラフィック特性に対する新たな解釈とセキュリティ攻撃などの異常トラフィックの識別可能性を示し、これらを 3 編の共著論文として発表していること、多数の人材交流と 6 回のワークショップ開催を計画通り実施し、国際的な人材育成に貢献した点は評価できる。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	システム生物学における仮説発見に関する研究 国立情報学研究所 井上克巳教授 国立科学センター Andrei Doncescu 准教授	H18-21	可	毎年、日仏シンポジウムを開催しており、交流は計画通り行われたと思われる、コンピュータサイエンスにおける日仏交流に貢献した。ただし、当初目標であったシステム生物学上の成果を報告書から確認することは難しい。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	ウェブ上の知識フェデレーションモデルの構築とグリッドモデリングのためのユビキタス知識発見への応用 北海道大学 田中譲教授 パリ 11 大学 Michele M. Sebag 上級研究員	H18-21	優	「ウェブ上の知識フェデレーションモデルの構築」についてはかなりの成果が出ているが、「グリッドモデリングのためのユビキタス知識発見への応用」については当初の目標が達成されていないようである。日本側のポスドクのフランス側での採用、フランス人学生のインターン等、十分な研究交流と人材の育成が行われていると考える。ワークショップ等も順当な回数開かれている。

別添資料 2 事後評価結果概要

フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	日仏間国際グリッドコンピューティング環境と国際的マトリクスソルバーの構築に関する研究開発 JAEA 中島憲宏主任研究員 ツールーズ情報研究所 Michel Dayde 副所長	H18-21	優	当初の目標は達成されたものと認められ、計算機環境を用いた e-Science の今後の進展を考えると、国際的に連携して計算基盤を確立したことは大きく評価できることである。相互に研究者の行き来があり、若手研究者の育成とともに、国際的交流を活性化していると評価される。さらに、計画に示されたワークショップだけでなく、米国で開催された国際会議におけるシンポジウムの開催等、積極的に広く成果を公開する努力がなされている。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	ロボティック内視鏡手術のための情報処理と制御に関する研究 東北大学 橋本浩一教授 ストラスブール大学 Jacques Gangloff 教授	H18-21	良	内視鏡手術において、新しい術式を開発したことなど、複数の価値ある成果を挙げているが、当初目標と最終成果がかならずしも一致していない。また、日仏双方の研究が有機的に結合されているようには見えない。育成した博士学生は、東北大学 1 名、ストラスブール大学 1 名であり、研究交流の成果としては、やや物足りない。相互派遣、ワークショップ開催などは行われているが、両チーム連名での学会発表がない。
フランス	コンピュータサイエンスを含む情報通信技術	フォノンニック結晶：新しい音響物質系 北海道大学 松田理准教授 FEMTO-ST 研究所 Abdelkrim Khelif 主任研究員	H18-21	良	それぞれの長を生かして、日本側とフランス側の研究分担を明確に分け、新しいデバイスの創造・製作をフランス側が、その特性評価を日本側が担当している。研究成果は挙がっているが、日本側とフランス側の研究分担内容が明確に分けられて、融合の度合いは少ない。共著の原著論文が 3 年間に亘って 1 件もなく、また人的派遣も一方的である。ワークショップ、セミナー等は計画段階において提案されておらず、結果として 1 件も開催されていない。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（大気 環境、水環 境、自然エ ネルギー 利用）	湖沼の富栄養化防止・修復のための持続可能 な生態環境保全技術の確立 国際科学振興財団 前川孝昭研究員 中国水利部 Yang Jifu 教授	H16-19	良	実用面で大きな成果を挙げ、且つ本テーマで中国側研究者を研究指導 された点も高く評価される。しかしながら、日本側の研究者が中国を フィールドとして研究している感が強く、研究交流のパートナーとし ての中国側の役割分担が明確でないと思われる。日中研究交流促進の 努力は認められるが、日本国内のセミナーに中国関係者が出席した姿 が見えず、中国側の研究者の日本での研究交流などは十分には実施さ れていない感がある。
中国	環境（大気 環境、水環 境、自然エ ネルギー 利用）	廃水からの栄養塩除去処理プロセスへの微 生物学的な視点の導入とその数学的モデル 化 東京大学 味埜俊教授 北京工業大学 Peng Yongzhen 教授	H16-19	良	応用研究主体の中国側の研究グループと基礎研究主体の日本側の研 究グループの研究交流の相乗効果は評価できる。研究交流について も、後半の2年間には中国側研究者を長期に亘り受入れ、ワークショ ップやシンポジウムが開催されるなど、人材育成の成果が伺える。し かし、成果発表の原著論文等もなく、具体的な結果が何であったのか、 残念ながら報告書からは読み取りにくい。
中国	環境（大気 環境、水環 境、自然エ ネルギー 利用）	持続性と環境生態インパクト低減を目指し た高度排水浄化・リサイクル技術システムの 開発と性能評価 横浜国立大学 藤江幸一教授 中国科学院 Yang Min 教授	H16-19	優	汚濁物質の測定・分離法等の研究で大きな成果を上げている。これは 研究論文や特許さらに学会賞受賞にも結びついており、大いに評価さ れる。さらに、研究交流の面からもシンポジウムへの共同参加や研究 の共同発表、中国側若手研究者の訪日などの成果があり、今後の持続 的な発展の可能性が認められる。しかしながら、研究計画と研究成果 報告書からは役割分担などが一部不明瞭な点がある。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（大気環境、水環境、自然エネルギー利用）	中国における都市と農村の持続的発展に関する研究 工学院大学 定方正毅教授・酒井裕司講師 清華大学 Xu Xuchang 教授	H16-19	優	酸性雨の問題と土壌劣化（砂漠化）の問題を同時に解決しようとするものであり、脱硫反応の低温化の達成、土壌改良効果の継続性の確認などの成果が認められる。中国における日中共同での研究会、フィールド調査なども積極的に実施されており、その過程で研究交流につながる日本側研究者の人材育成がある程度なされていると思われるが、中国側の予算の制約からか、一方通行になっているのは残念である。
中国	環境（大気環境、水環境、自然エネルギー利用）	都市域における PM2.5 大気汚染特性と生成機構解明研究 愛媛大学 若松伸司教授 清華大学 Hao Jiming 教授	H16-19	秀	国境を越えた PM2.5 の生成、輸送機構を研究するための基礎基盤として研究手法の統一化を行ったことにより、大気汚染問題の対策技術が進展する可能性はきわめて大きい。人材の育成については、日中間の交流を通して観測、測定、解析、モデリングなどに関する研究が多数実施しており、共同研究する基盤としての人材育成がなされている。シンポジウムや中国側研究者の日本での研修等を通して、技術および人的交流が計画通り進められ、当初目標は十分に達成されたと考える。
中国	環境（大気環境、水環境、自然エネルギー利用）	太陽光熱複合発電システムのためのハイブリッドモジュールの高性能化に関する研究 JAXA 新野正之主幹研究員 武漢理工大学 Zhang Qingjie 教授	H16-18	秀	日中共同発表の論文成果もあり、2 件の特許に見られるように、太陽光発電と熱電発電を同時に行うシステムについて新しい知見、技術の進展、新分野の開拓が認められる。また、成果が新聞報道に多く取り上げられるなど、成果が社会的に与えた影響は大きい。ワークショップは計画通りに開催されており、相互交流は計画以上に十分達成された

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（大気環境、水環境、自然エネルギー利用）	中国における風力エネルギー導入促進のための基盤技術の研究 足利工業大学 牛山泉学長 瀋陽工業大学 Yao Xingjia 教授	H16-18	良	両者の協働による具体的な進展が明示的に報告されていない。計画通りセミナーやワークショップは開催されているが、本課題の日中の研究交流実施体制が判然としておらず、その体制と交流及び研究の成果がどのように繋がっているのかも不明である。
中国	環境（大気環境、水環境、自然エネルギー利用）	中国西部における自立分散型太陽光熱複合発電システムの開発 航空宇宙技術振興財団 鈴木一行副主任研究員 武漢理工大学 Tang Xingfeng 教授	H16-18	良	太陽光熱複合発電実証システムを設置したこと、製品化された熱電発電モジュールを中国側のシステムに組み込んだことなどの成果が認められ、共著論文も発表している。ただし、同テーマで採択されている課題（新野／Zhang プロジェクト）と同一目的の研究であり、本課題内だけを切り離して評価した場合、十分な成果・交流があったとはいえない。
中国	環境（生活環境の健康への影響、環境に配慮した新エネルギー技術）	廃棄物・廃水からの高効率の水素/メタン回収プロセスの開発 東北大学 原田秀樹教授 中国科学技術大学 Yu Hanqing 教授	H17-20	優	日本の先端的な分子生物学的手法を中心とする研究と中国における経験的手法による研究が相補的に機能した点で交流の有効性が大変大きい。廃棄物・廃水処理における次世代型の高効率バイオマス・エネルギー変換技術の開発において基礎技術の開発、また新しいメタン生成菌の発見（単離）など注目すべき結果を得ており十分は達成度といえる。ただし、いずれも端的であり今後に待つところ大である。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（生活環境の健康への影響、環境に配慮した新エネルギー技術）	バイオエタノールディーゼル燃料及び後処理触媒プロセスを用いた環境調和型ディーゼルエンジンシステムの開発 九州大学 寺岡靖剛教授 中国科学院 He Hong 教授	H17-20	良	両者が最も得意とする分野を分担して研究をすすめ、相当レベルの成果を得た点は評価できるが、異なる課題を独立に検討することに始終しており、研究の内容において問題意識、課題の共有化が不十分であった。また、成果の多くは今後解決すべき研究課題の明確化にとどまっており、実用研究としての取組みが不十分であった。
中国	環境（生活環境の健康への影響、環境に配慮した新エネルギー技術）	持続可能なサニテーションシステムによる生活環境の改善・健康リスク低下に関する研究 北海道大学 船水尚行教授 西安建築科技大学 Wang Xiaochang 教授	H17-20	優	新しいコンセプトのサニテーションシステムを主張し実現しようとしている研究であり、実証プラントを水に乏しい中国におき研究の計画・解析は日本と中国が非常に密接に協力してすすめている。当初の目標は広汎にわたる大部分が極めて良好な達成状況にある。国際シンポジウムも度々開催され、また研究者の交流も十二分である。
中国	環境（生活環境の健康への影響、環境に配慮した新エネルギー技術）	有害化学物質の室内および個人暴露の国際比較とその低減対策 静岡県立大学 雨谷敬史准教授 浙江大学 Zhu Lizhong 教授	H17-20	可	日中間で室内汚染の測定を共同で行ったことは汚染の国際比較、測定法の標準化の点も含めて有意義であった。しかし、交流・機材・事前準備などが不足しており、研究の進展に支障をきたした点は問題であった。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（生活環境の健康への影響、環境に配慮した新エネルギー技術）	フロン及び 1,1,1-トリクロロエタンの代替有機溶剤（トリクロロエチレン）使用者に多発する重症型皮膚－肝障害のメカニズム解明と予防に関する戦略的研究 名古屋大学 那須民江教授 広東省職業病防治院 Huang Hanlin 院長	H17・20	良	実際の工場における労働者の重症型皮膚炎－肝障害を対照としており、諸条件を自由に選択できず、患者の数も限定されており症例をそろえることも難しいなど困難な課題であった。現地（中国）の患者のケア、諸検査、労働環境の調査などで重要な寄与はあったと評価できる。しかし研究レベルでの交流には全くいたっていない。未知の問題の解明であり達成度を指標とするのは適切とはいえない面もあるが、個別の検討項目がいずれも明確な結論にいたっていないので、達成度は高いとはいえない。
中国	環境（流域圏の汚染・劣化に関する影響評価と対策技術）	黄河の将来政策シナリオを評価するための「次世代」生態水文モデルの開発 東京大学 沖大幹教授 清華大学 Hu Heping 教授	H18・21	良	本側と中国側の研究分担を明確にし、観測とモデル担当をうまく整理して効率的に研究を展開したと思われる。その成果の一部は学術論文として公表されているが、全体としてみれば、研究成果の発表論文が少ない。両大学の大学院生の交流が活発に行われており、人材育成も推進されたと言える。ただし、研究者の派遣は計画より少なく、滞在日数も短期であった。また、本課題主催のシンポジウム開催実績がないなど、当初の予定や期待を充足していない部分がある。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（流域圏の汚染・劣化に関する影響評価と対策技術）	日本と中国の農業生態系流域における窒素循環およびその水質に及ぼす影響に関する比較研究 東北大学 齋藤雅典教授 中国科学院 Cai Zucong 教授	H18-21	優	日本と中国における農業生態系流域を比較しながら窒素循環を解明し、その水質への影響を評価・予測するとともに汚濁源としての面源負荷削減策を提案したことは評価できる。相互訪問、ワークショップ・シンポジウムの開催、人材育成、学術誌・学会での公表等はほぼ計画通りに実行された。中国側研究者の来日や日本の研究者の中国訪問と調査研究交流により、日本の測定手法やデータ解析手法が中国側に技術移転されたことは高く評価できる。若手研究員や大学院生を相互派遣した人材育成の実績、日中共著論文の国際誌掲載等も評価に値する。
中国	環境（流域圏の汚染・劣化に関する影響評価と対策技術）	持続可能な流域水循環保全／物質・エネルギー生産融合システム及びその基盤技術の開発 東京大学 迫田章義教授 清華大学 Hu Hongying 教授	H18-21	良	ダンチクの工学的利用や湿地の管理手法を日中の共同研究で提案した成果は高く評価できる。一方、ファイトレメディエーションシステムとバイオマス原料を活用した物質・エネルギー生産システムを融合した多機能湿地システムの設計までは至っておらず、更なる研究展開が期待される。人的な交流は、合同会議や相互訪問、シンポジウムによって十分行われたが、若手研究者の参加を得ていれば、将来の研究交流と人材育成の進展に繋がったと推測される。

別添資料 2 事後評価結果概要

中国	環境（流域 圏 の 汚 染・劣化に 関する影 響評価と 対策技術）	水の反復利用によるリスク低減のためのモ ニタリング評価と対策技術に関する研究 京都大学 津野洋教授 清華大学 Huang Xia 教授	H18-21	優	日本側の有する微量化学物質の高度分析技術を中国側で利用し、微量 有害化学物質と病原性微生物に注目して日中の汚染実態の解明やリ スク評価の手法確立の課題に取り組み、大きな成果をあげた。一方、 対策技術についてはこれまでの研究の継続に留まっている。人材の交 流については、多数の研究者や大学院生が参加して分析技術習得のた めの研修や、共同調査、シンポジウム等の学術集会も予定通り実施・ 開催された。その成果は研究実績および業績としてあらわれているこ とから、研究交流の中で十分な人材育成が行われたと考えられる。
中国	環境（流域 圏 の 汚 染・劣化に 関する影 響評価と 対策技術）	水利構造物による淮河流域の水環境劣化の 実態把握と対策に関する研究 国立環境研究所 村上正吾副グループ長 中国科学院 Xia Jun 教授	H18-21	可	研究者の派遣は多く、4回のシンポジウムが開催されたことにより人 的な交流は推進されたが、開催されたシンポジウムは広く公開されて おらず、関係研究者による情報交換の場であったと推測され、研究成 果を発信する努力が足りなかった。また、若手研究者の参画が少なく、 人材育成が達成されたとは言いがたい。当初の研究目標であった、モ デル開発やモニタリング技術等の高度化、日中共同でのモニタリング 等についての論文や学会での発表が見受けられず、具体的な技術進展 まで至っていないと考えられる。
中・韓	国の通知 に基づく 4 プロジ ェクト	東アジアにおける GPS を用いた地殻変動の 研究 東京大学 加藤照之教授 中国科学院 Xu Houzhe 教授 韓国国立天文台 Park Pil-Ho 主任研究員	H16-19	良	若手研究者を前面に押し出し、アムールプレートの問題を中韓の研究 者間で共有するまでにいたったことは評価できる。また、中国国内や モンゴルにおける新たなデータにより、プレート運動に関する知見が 増えたことも、成果として評価できる。一方で、GPS データの共有 が関係国の間で実現できなかったことに加え、H18 年度途中に韓国が 途中で事業を中止させたことで、本来想定されていた目標は達成でき なかった。

別添資料 2 事後評価結果概要

中・韓	国の通知に基づく 4 プロジェクト	砂漠化を抑制する乾燥耐性植物の開発 鳥取大学 田中淨教授 中国科学院 Deng Xiping 教授 韓国生命工学研究院 Kwak Sang-Soo 室長	H16-19	良	耐性作物開発のために多くの積極的取り組みがなされ、共著論文を含む多数の論文が発表されたことは評価できる。そのほかにも、相手国との間で頻繁な交流が行われたことは高く評価できる。しかし、野外での耐性評価実験が十分実施できなかった。また、植物の乾燥耐性遺伝子単離のための戦略が明確でなく、真に乾燥耐性に関わる遺伝子を同定したかどうかは不明である。人材育成については、相手国との間で多数の専門家の交流が行われたことは評価できるが、若手研究者同士の交流がもっと行われていれば、人材育成の点でより有益であると考えられる。
中・韓	国の通知に基づく 4 プロジェクト	日韓中の極短パルス高強度レーザー研究協力のための連携体構築 JAEA 田島俊樹所長 中国科学院 Zhang Jie 局長 光州科学技術院 Lee Jongmin 教授	H16-19	優	本課題では、大学院博士課程学生から教授・所長クラスまでの幅広い層が参画し、研究者の交流、小規模共同研究、シンポジウムなどを行い、将来も交流が持続発展する連携体を構築することができており、一定以上の成果を挙げたといえる。また、研究成果に関しても、当該連携体構築で相乗効果が発揮され、共同研究によってのみ創出できる新規成果が発信できた。
中・韓	国の通知に基づく 4 プロジェクト	アジア地域における標準物質開発ネットワークの構築 産総研 千葉光一副部門長 中国国立標準物質研究センター Yu Yadong センター長 韓国標準科学研究院 So Hun-Young 主席研究員	H16-19	優	本研究交流によって、各国のレベルアップも兼ねた、標準物質の作成技術、評価技術、保存技術、利用情報の共有等々に係わる連携が、三国の間でより緊密となったと考えられ、今後のアジア地域からのグローバルな貢献につながるものとして大いに評価できる。若手研究者の派遣は1件報告されているのみであり、人材育成という面からは不十分と考えられるが、科長・室長クラスの訪問は十分に行われた。シンポジウム、ワークショップの開催については、計画どおり十分に頻繁に開催され、所定の成果が上がったと言える。

別添資料 2 事後評価結果概要

南アフリ カ	国 の 要 請 に 基 づ く 研 究 交 流 課 題	感染症克服に向けた南ア固有植物への価値 付与のための分子遺伝学的研究 理研 村中俊哉チームリーダー プレトリア大学 JJ Marion Meyer 教授	H16-19	優	本課題では、キニーネ耐性マラリアに抜群の薬効性を示すアルテミシニン産生能を有する植物と、同属であるが薬効性を示さない南アフリカ固有種の比較解析を行い、その結果、発現遺伝子のリソース確立やアルテミシニン生合成酵素遺伝子候補の単離やセスキテルペン類分離分析技術の開発など、今後の研究の進展につながる画期的な研究成果が得られた。相互派遣等の交流は大学院生やポスドク、教員など幅広く実施され、十分な交流がなされたと考えられる。また、アフリカ資源高度利用アフリカ・日本植物科学者合同シンポジウムの開催は、今後のアフリカとの研究交流における人材の育成に大きく貢献したと考えられ、高く評価される。
-----------	--------------------------------------	---	--------	---	---